

編集室

* 5月の編集連絡会から、編集理事としての仕事の実質的に始まりました。理事会、担務連絡会、著作権管理委員会、会誌編集委員会、支部長会議、国際委員会、海外セクション代表者会議、各種表彰委員会。予算編成作業もあります。非常に大きな稼働です。しかも、編集長、編集特別幹事や各ソサイエティ編集長、各論文誌編集委員長、総勢数百名を超える各誌編集委員の皆様が、事務局の皆様とともに編集作業の多くをやって下さっているにも関わらず、まだこれだけの仕事があるということに、今更ながら驚きます。また、こうした仕事ボランティアで行われていることについては、未来永劫多くの方々の善意に頼る方法で大丈夫なのかという不安と同時に、その厚意を無にすることのないよう、充実した誌面にせねばという思いを強くします。お手元に届いた今月号の会誌や論文誌は期待に応える内容でしょうか。多くの方々の努力が伝わっていますか。

* この時期、雨にぬれる緑は目にも鮮やかです。深い緑もいいですが、新芽の浅い緑は、また格別です。そしてひと雨ごとに、緑は濃く生い茂っていきます。通勤の途上でも多くの緑を目にすることができます。ツゲの生垣の新芽が伸びて、剪定を催促するようです。ツバキやユズリハの葉の光沢は、何と見事でしょう。この時期は、木々の花々の時期でもあります。多くの種類のサツキが、文字どおり、この時期に開花します。ミカンの花の甘い香りが漂い、心を和ませます。つるバラのつぼみも咲き始めました。ザクロの花も見つけました。

研究管理は、しばしば植物の育て方に例えられます。種をまき、水や肥料を与え、雑草を除き、受粉させ、時には摘果し、ようやく収穫となります。論文誌は収穫物の展示場であり、会誌は新しい種や肥料の見本市であるとともに、交配や受粉のための媒介場である、ということになりましょうか。収穫物がより良く見えるよう展示場を整えるとともに、より

新鮮な収穫物を展示することが必要です。また、多くのお客様に来て頂くためには、展示場の存在自体を知らしめること、良い収穫物をそろえることも当然重要です。新しい種や肥料の見本市も同じようなことが必要になります。新たな種や肥料の存在を早く知ってもらうこと、有望な種や肥料をより多く知ってもらうこと。媒介場としては、媒介をする鳥や虫、あるいは作業をする人を十分にそろえて、受粉や交配の対象の来場を待つ必要があります。たくさん来場して頂かなければ受粉も交配も成立しないので、存在を知ってもらうこと、たくさん利用してもらうこと、が特に重要です。新たな種類の収穫物、品種改良のための交配が、今後より重要となるでしょう。そのためには、多様性豊かな対象の来場が望まれます。

* 京都において、本会通信ソサイエティも共催の ICC (IEEE International Conference on Communications) 2011 が開催されました。オープニングセッションの Lee IEEE Communications Society 会長の講演では、東日本大震災被災者に対する哀悼の意を表すべく1分間の黙とうが行われ、非常に厳粛な雰囲気の中で同会議は始まりました。3月の震災直後には、海外からの延期や場所の変更要望があったと聞きます。オープニングセッションで登壇した各氏が一様に震災に触れたことを含めて、特異な環境での開催となりましたが、蓋を開けてみれば、1,700名超という予想を上回る登録者数を記録し、大盛況となりました。私自身も海外からの参加者に、震災に関する多くの質問を受けましたが、参加者の多くは、日本の再生の第一歩を感じたのではなかったかと思います。また、幸い梅雨の晴れ間にあたり、やや蒸し暑かったものの、緑豊かな京都を多くの来訪者に楽しんで頂けたと思います。

(編集理事 斎藤 洋)